第七場面　七組のまとめ

「僕」は、エーミールに説明した。しかし、彼は激したりしなかった。どんな物をあげても許してはくれなかった。「僕」は、自分で責任を取るために、闇の中でちょうを一つ一つつぶすことで、ちょうとの思い出とともに、自分が犯した罪を消そうとした。

川瀬李加

「僕」は、エーミールやクジャクヤママユのために、自分の宝のようなちょうをつぶすことで、エーミールの気持ちを少しでも分かることができたらなと思ったし、これに懲りて、もうちょうを見たくない、見たらまたつらい思いが出てきそうだと思った。

浅井健太朗

「僕」は、エーミールのクジャクヤママユを壊してしまってから、謝ったものの、謝り方を間違え、許してもらえなかった。そのため、「僕」は、自分の罪を償うために、大切なちょうの収集を一つ一つ大事につぶした。つぶすことで自分がエーミールのクジャクヤママユを台無しにしてしまったことを罰した。

遠藤真惟子

「僕」は、激したり怒鳴り散らしたりしない彼に、自分のちょうをやると言った。しかし、彼は「僕」のちょうの扱いを悪く見た。そして、彼は冷たい目で「僕」を見て、「僕」の地位を見せつけるように立っていた。「僕」は家に帰り、視界がはっきりしない暗闇の中で、ちょうがしまってある箱をあけた。そして、一つ一つ、いろいろな思いをかみしめるかのように、ちょうをつぶしてしまった。それは、自分を決して許さないためにした行動だった。

謎の人物

「僕」は、エーミールにすべてを打ち明けた。でも、「僕」は、自分が悪いとは思っていない。エーミールは、自分のちょうを壊され、悔しい気持ちとあきれた気持ちが混ざって、怒らなかった。けど、軽蔑的に見た。「僕」は、一度起きたことはもうどうしようもないと悟った。母は優しくしてくれたが、自分を罰するため、ちょうを闇の中で一つ一つ指で押しつぶした。でも、心のどこかに、ちょうが自分を狂わせたと、現実から逃げている。

堀江芹奈

「僕」は、エーミールのクジャクヤママユを盗んでつぶしてしまった。「僕」はエーミールにおもちゃをすべてやると言ったが、許してもらえず、ちょうをすべてやると言っても許してもらえず、もうどうすることもできなかった。大きなとび色の厚紙の箱を寝台の上に載せ、大切なちょうを一つ一つ取り出し、指で粉々に押しつぶすことで、自分の罪を償おうとした。

丹羽慈人

「僕」は彼に、「僕のおもちゃをみんなやる」と言った。しかし、彼は、「僕」のやり方を汚いとでもいうような感じで断った。「僕」は、自分がやったことはすべてを忘れたかった。自分は、謝りに行ったより、姿もよく分からないくらいつぶれたクジャクヤママユを見る方がよっぽどつらかった。そして、自分の持っている思い出がたくさん詰まっているちょうを、クジャクヤママユをつぶしたみたいに、ひとつひとつ指で粉々につぶしてしまった。

池田紗英

「僕」は、彼のクジャクヤママユをつぶしてしまい、おもちゃやちょうを全部あげると言っても、彼は聞く耳を持ってはくれなかった。そのとき、「僕」は、今回のことはどうしても償うことができないと分かり、以前にも増して、クジャクヤママユをつぶしてしまったことを悔やんだ。そして、どうしようもなかった「僕」は、自分を罰するために、自分でちょうを一つ一つ押しつぶすことで、「もうこんなことを起こしてはいけない」と心に誓った。

植木伯臣

彼は、「僕」に怒鳴りつけるようなことはせず、冷たい目で「僕」を見つめた。「僕」はおもちゃやちょうを全部やると言った。しかし彼は、僕の口調が気にくわなかったのか、「僕」のすべてを否定した。「僕」はすんでの所で彼ののど笛に飛びかかるのを抑えた。彼はそんな「僕」をよそに、ののしりさえせずにただ「僕」を眺めていた。そこでやっと「僕」は、自分のしたことは償いようのないことだと気づき、家に帰った。そして、暗闇の中で、「僕」はちょうの思い出を消し去り、もう二度と同じことは起こさないと心に誓った。

満仲安紀